

平成31年度入学 推薦入試（一般、専門高校・総合学科）、震災特別推薦入試 試験問題の出典  
社会福祉学部

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	—	永田 和宏	知の体力	新潮社, 2018年より pp.15-20	新潮社

平成31年度 推薦入試（一般，専門高校・総合学科）

## 社会福祉学部

### 小 論 文 (90分)

#### 注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまでは，この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は，3ページあります。なお，下書き用紙が2枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明，ページの脱落などがあった場合は，手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は，必ず**黒鉛筆**（シャープペンシルも可）で記入し，ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には，氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は，必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば，下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後，問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 100 点)

答えは確かに〈ある〉。それが初等中等教育における「問題」の大前提である。そして先生はその答えを知っている。その正しい答えに、どうしたら自分たちも到達できるだろうか。先生が知っているはずの答えと自分のものが一致すれば正解で、違ってればバツ。それが入学試験も含めて、高校までの試験の問題であった。

①考えてみると、これは怖いことではないか。なぜなら、小学校から高校まで、誰もが一貫して、問題には必ず答えがあるということを前提とし、正解は必ず 1 つであると思い込んできたのだから。教師の側も、答えが 2 つも 3 つもある問題は避けてきただろうし、答えのない問題は出しようがなかった。

どこかに正解があって、その正解は自分が知らないだけであって、誰かが(たぶん誰か偉い人が)知っている、頭から思い込んでいること、その呪縛のまま、大学においても同じスタンスで教育を受け、そして社会に出ていく。そんな社会人ばかりが増えていくと考えることは怖いことではないか。

高校までの教育においては、これはやむを得ないことである。しかし、実社会に出て、そのような答えのある〈問題〉というのは、実は何ひとつないのだと言ってよい。

たとえば『広辞苑』は、「問題」に 4 つの意味を載せている。曰く「①問いかけて答えさせる題。解答を要する問い、②研究・論議して解決すべき事柄、③争論の材料となる事件。面倒な事件、④人々の注目を集めている(集めてしかるべき)こと」。

このうち、答えがあるものは①だけ。そして、実社会での問題と言えば、②から④までどれをとっても、それには答えがない。あるいは解答や正解を前提としないものである。

たとえば沖縄に基地が集中している「問題」。日本全土のわずか 0.6 パーセントの土地しか持たない沖縄県に、全国に存在する米軍基地の 70 パーセントが集中している。日本人なら、これをそのまま放置しておいていいと考える人はおそらくいないはずである。しかし、これをどうしたらいいのか、その解決法が見つからないままに放置されているのが、放置され続けてきたのが、沖縄問題の本質である。

誰もが申し訳ないと思うけれど、それじゃあ私たちの県で引き受けましょうとは、誰も言わない。米軍基地のない日本が安全保障の面からやっていけるのか、と言ったより本質的な問題を措くとしても、同じ国民である以上、負担は公平であるべきだという、一応の「正解」さえもここでは放置されたままである。

このような問題は、誰かに尋ねれば正解を与えてもらえるという問題では決してないのだ。また単に正解を求めるという作業だけでは決して解決できないものなのである。私たちは、そんな社会に暮らしているし、若者たちは、大学を出れば、そのような社会のなかで生活をしなければならなくなる。

おまけに、数学や物理などの複雑な問題になると、参考書には、模範解答として、どのようにして正しい答えにまでたどり着くか、その道筋そのものを指導しているものが多い。まことに懇切丁寧な

指導であり、効率的な学習をするには必要なことであるには違いないが、ほんとうはここにも大きな問題があるだろう。つまり、考え方そのもの、考える道筋そのものが画一化されており、出てきた問題は、どの解き方で解けば正解にたどり着けるのか、問題の解法を考えるのではなく、すでに教えられてきた解法のどれに当てはめればいいのかを問うといったものになっている場合が圧倒的に多い。

いわば定石にあてはめるのであり、受験勉強で多くの問題を繰り返し解く練習をさせるのは、この定石にいかにあてはめるか、その技術を叩き込んでいるのである。碁でも将棋でも、定石（将棋では定跡）を知っているということは勝つための基本であるが、受験勉強であるいは入学試験で実際に要求されているのは、ほとんどがこの定石を思いだせるかどうかにかかっているとんでも過言ではない。

これは受験勉強ということからはやむをえないことであり、実際、限られた試験時間のなかで、解き方を一から考えていたのでは、すべての問題を時間内に片づけることなど到底できない。定石にあてはまるものは、定石通りに打っておけばいいのである。時間を無駄にすることはない。

しかし、碁でも将棋でも、実際の勝負ということになると、定石（定跡）にあてはまらないところでこそ、勝負が決するのである。定石を基本としながらも、定石で打ちかえせば負けるような打ち方を、相手は当然考えてくる。知っていなければ負けるが、定石通りに打っていては負ける、というのが実際の勝負の場であるはずである。大学を卒業して、たちまちに出会う社会での問題は、このような定石では太刀打ちできない問題であることのほうが圧倒的に多い。

問題には1つの答えがあるものだと思ってきた教育と、何一つ絶対的な答えというものがなく実社会とのあいだに、バッファー（緩衝帯）が必要だと私は思っている。大学の大切な役割の1つは、高校までの教育と実社会とのあいだのバッファーとしての役割である。高校を卒業して社会にでる人も多いわけであり、ほんとうは高校にもそのような役割があってほしいとは思っているが、少なくとも大学には、そのような役割は必須のものだと私は思う。

これまでに教わってきた解き方、対処の仕方では対応できない問題に遭遇したとき、どのように自分で考えられるか、どのような解法を模索できるのか、実社会に出れば、それは待ったなしの要請として現前するはずのものである。

②問いがあっても答えがないという、それまでに経験したことのない宙づり状態に耐える知性。答えがないということを前提に、なんとか自分なりの答えを見つけようとする意志。それにめざめさせるのが、大学の4年間であり、その責務である。誰かに尋ねれば、必ず答えがあるはずだ、与えてくれるはずだという依存性から脱却する必要がある。

（永田和宏『知の体力』，pp.15-20，新潮社，2018年より，一部改変）

問1 下線部①「考えてみると、これは怖いことではないか」とする作者の意図を、250字以上 350字以内で説明しなさい。

問2 下線部②「問いがあつて答えがない」という問題へ対処するためには、どのような能力が求められ、その能力を身につけるためにはどのような取り組みが必要なのか、それに対するあなたの考えを550字以上 650字以内で述べなさい。